



創刊号

音童

わらべ館
童謡・唱歌研究情報誌



音夢

誌名「音夢」おとむについて

童謡・唱歌とおもちゃのミュージアムであるわらべ館は、

「すべての子どもたちと子どもたちの心を忘れないすべての大人たちのため

(For Kids and Kids at Heart)」の施設です。

子どもたちの音楽(うた)に、夢を乗せて

全国へ届けたいという願いから、誌名を、「音夢」にしました。

題字／小林直樹（鳥取県文化観光局 文化政策課 課長）
鳥取県美術展・鳥取市美術展 無鑑査

わらべ館 童謡・唱歌研究情報誌『音夢』編集委員

白石 由美子(委員長)
(鳥取短期大学教授)

西岡 千秋
(鳥取大学地域学部附属芸術センター助教授)

藤井 浩基
(島根大学助教授)

中田 達也
(鳥取市立福部中学校校長)

事務局

吉田博道 (調査・展示係長)

長嶺泉子 (" 専門員)

川崎香苗 (" 専門員)

山本繭子 (" スタッフ)

わらべ館 童謡・唱歌研究情報誌『音夢』創刊号

ISSN 1881-9583

発行日／平成19年3月30日

編集／わらべ館 童謡・唱歌研究情報誌『音夢』編集委員会

発行／財団法人 鳥取童謡・おもちゃ館

〒680-0022 鳥取市西町3丁目202

TEL. 0857-22-7070



目次

ごあいさつ	わらべ館館長	神戸 直樹	2
創刊に寄せて	鳥取県知事	片山 善博	3
特別寄稿	奈良教育大学教授	安田 寛	4
論考			
「童謡・唱歌のふるさと鳥取」のあゆみ			
——「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールを中心に——			
鳥取県西伯郡大山町立大山小学校教諭	宮内美由紀		8
トピック			
鳥取藩士が集めたわらべうた			
——日本最古の童謡集『筆のかす』と『古今童謡』——			
鳥取県立博物館学芸員	大嶋 陽一		
わらべ館専門員	川崎 香苗		18
岡野貞一の作曲作品は日本の宝!!	とっとり童謡唱歌の会会長	鈴木 恵一	24
鳥取教会と永井幸次・岡野貞一	鳥取教会牧師	大前 幸正	26
わらべ館活動報告			
資料収集委員会の発足と活動	資料収集委員会委員長	白石由美子	28
音楽教科書収集の報告	わらべ館専門員	川崎 香苗	30
わらべ館事業報告(童謡・唱歌関連)			
①企画展			
②講演会と追悼展			
③イベント			
施設紹介「わらべ館」			
編集後記	編集委員	藤井 浩基	48

ごあいさつ

わらべ館館長 神 戸 直 樹



わらべ館は、①童謡・唱歌とおもちゃをテーマとしたミュージアム、②国の内外に誇りうる鳥取の重要な文化施設、③子どもたちやお年寄りの重要な社会教育施設、生涯学習施設の三つの役割を運営の柱として、地域文化の振興に貢献する施設となるよう努力しています。

平成十七年七月七日におこなわれました「わらべ館開館十周年記念式典」において、来賓の片山善博鳥取県知事から「わらべ館は、今後、学芸的機能、研究機能を強化し、その成果を蓄積し、鳥取県における童謡・唱歌とおもちゃの拠点性を増すと共に全国でも重要な存在になることを願っている」とのご祝辞をいただき、わらべ館の運営の方向性に対して確信を持つことが出来ました。

わらべ館は、今後、特に童謡・唱歌やおもちゃについてのミュージアムの機能を充実させ、その拠点施設として全国に情報発信をおこなう事の出来る文化施設となるよう一層努力したいと考えています。

今回、その第一弾として童謡・唱歌の研究・情報誌「音夢」おとむ第一号を発刊することとなりました。今後、内容に一層の工夫を凝らし、更に充実したものにしていこう所存です。どうかご指導・ご協力をお願いいたします。

重ねて「わらべ館」への温かいご支援・ご鞭撻をお願いをし、童謡・唱歌研究・情報誌「音夢」第一号発刊のご挨拶といたします。

創刊に寄せて



鳥取県知事 片山善博

先日、二歳半になる孫娘を連れてわらべ館を訪ねました。彼女が最も目を輝かせたのが音階のコーナーで、そこを離れようとはしませんでした。私が一番長くいたのは童謡唱歌が聞こえる教室です。この教室は、時折訪ねてくる両親にとつても教員生活を思い出す格好の場所となっています。子供には楽しい夢を与え、大人には暫し昔日を懐かしむ空間を提供する。わらべ館のミッションの一つは、この機能を提供することにあります。

文化は一度失ってしまえばそれっきりですが、大切に育めば財産です。地域に根ざす文化を共有し、これを後生に伝えることは今を生きるものの責務です。長い年月をかけて、新しい発見や創造を順次加えていく。この地道で知的な作業の積み重ねが、まちに深みと魅力を、そして人々に心の豊かさと活力をもたらします。これもわらべ館の重要なミッションです。「音夢」がこのミッションの道しるべとなり、わらべ館成長の牽引車となることを願ってやみません。

T宣教師とK少年の話

奈良教育大学 安田 寛

新たな拠点を開拓するためいくつかの河と峠を越えて新しい土地を目指す。そこはまだ異教徒たちばかりであるが大勢の改宗者が見込まれている有望な土地である。悩みは異教徒たちの歌声のでたらめさであった。てんでばらばらに叫んでいるとしか聞こえない。T宣教師は女性だったから演説よりもそのよく通る張りのある美しい声で手本となつて導くことを期待されていた。

彼女はいつも会場を注意深く見渡す。そして一人の見込みありそうなK少年を探す。目をつける少年を呼び出し、めずらしい食べ物を与えたりして、歌を教え込む。次の集会になると、その少年の声が異教徒たちのお手本となり励みとなつてこの素朴な人たちも少年の歌声についてなんとか歌えるようになるだろう。

これはありふれた伝道の手口であるから、この話には時と場所がない。仮にそれを明治十九年六月のある日、鳥取市とすると、T宣教師はタルカット女性宣教師に、K少年は永井幸次少年になる。タルカットは明治六年に来日し、神戸女学院の基礎を作ったことで知られている。永井幸次は大阪音楽大学の創設者で、鳥取が生んだ三人の偉大な音楽教育家の一人として知られている。後の二人は田村虎蔵と岡野貞一である。

大人になった永井少年は次のように回想している。「彼」と言うのが永井少年である^(注1)。

「その時彼はタルカツ女史の近くに座を占めて女史の歌声に耳を傾けたが、言葉が明瞭で声も

綺麗であり、時々彼の方に眼を向けていた。閉会后、女史に附添つて来た横田夫人が彼を呼びとめ、タルカツ女史が、讚美歌を持つて明日午後1時に宿に来るように、との伝言をした。彼は悦んで讚美歌を携えて約束の時間に行くと、タルカツ女史は彼に讚美歌を口授してくれた上に、コーヒヤカステラなどもくれた」

こんな風に想像してもいいだろう。少年は食べたこともないお菓子や飲み物を恐る恐る口にいれ、口に含んだ。これまでのどれとも似ていないその甘くそしてほろ苦い味は、少年を想像も出来なかつた別世界に連れていった。昨日生まれてはじめて聴いたあの美しい声。その同じ声が耳元で歌われた。舌に残っている甘さと耳から入ってくる甘さにK少年の心はとろけるようだった。その声に合わせてK少年は懸命に歌った。その声と一緒に歌うと自分の声もどんだんきれいになってゆくような気がした。さて次の日曜日の礼拝になると、牧師は催促するような眼差しを少年に向ける。とたんに少年はコーヒーとカステラの味を思い出す。すると反射的に覚えてたの歌を懸命に声を張つて歌っている自分がそこにいた。その声につられて周りの人達がどうやら歌い出す。少年の胸は得意さにはち切れそうで、身体が浮かび上がる心地がしたに違いない。奇跡のような出来事でさえあつた。

ある時ある場所で起こつた出来事はほかの時ほかの場所で起こつた様々な出来事と関係の強弱はあつてもじつに複雑に絡み合っている。特定の出来事はこの絡み合いによって意味が決まる。いやむしろ無限にあるそのからみあいのどれを取り出すかによつて意味が異なつてくる。ここに後年音楽家として成功する永井少年がもうその頃から音楽の才能を発揮していて、それは宣教師も認めるほどであつた、というようなありがちな関係を見いだす事も出来よう。

Hawaii	Mortlock	Ponape	Kusaie	Marshall	Gilbert	Japan	Korea
1834			1865	1881	1875	1878	1895
1844			1876	1891	1881	1882	1910
1850			1889	1895	1883		
			1894		1885		
			1897		1897		

タルカット宣教師と永井少年とに起こった出来事の意味を決めるために、ここでは永井幸次も知ることの出来なかつた関係を取りだそう。そのための鍵として永井少年がオルガンではじめて上手に弾けるようになった唱歌「見渡せば」の原曲となつた讚美歌「Greenville」を選ぶ。

この表は、讚美歌「Greenville」がハワイ、ミクロネシア、日本、韓国で讚美歌集に登場した年を表している。日本と韓国の太字の斜体の年は唱歌としてはじめて掲載された年を表している。

この表は何を物語るか。あるいは何を想像させてくれるか。それは表の数字の背後には多くのT宣教師、K少年の話があつたに違いないということである。

タルカット宣教師と出会う前、永井少年の家に日本人宣教師がやってきて、集まっていた人たちに『小学唱歌集』を取り出して披露した。この教科書は表にある通り一八八二年に文部省から出版されたものであつた。この本の中に讚美歌「Greenville」の旋律を用いた唱歌「見渡せば」がはじめて登場したのであつた。同じような例は他にもたくさんあつて、日本では讚美歌から唱歌が生まれたことの証となつている。それにも増して重要なことは、この誕生、つまりは讚美歌から唱歌への変換は多くの地域で起こつたことではなく、日本だけで起こつた、ということにある。そのことを強調するなら、唱歌の誕生は奇跡であつた、と言わなければならぬ。

ハワイにもミクロネシアにも多くのT宣教師、K少年がいたことであろうが、讚美歌が唱歌に変換される、という奇跡を体験したのはある特定のK少年だけだ

った。それが永井幸次だったのである。

そんなわけで、永井少年はこの後、讚美歌が唱歌に変換されたという奇跡が未来に向けて照らし出した道の上を歩いてゆくことになる。タルカット宣教師が永井少年に目をつけたとき、何も彼を音楽家にする意図などはさらさらなく、ただ布教目的のためだったに過ぎない。にもかかわらず永井少年が音楽家になり影響力の大きい音楽教育家となったのは、日本では讚美歌が唱歌になるという奇跡が起こっていたからである。この奇跡がなかったなら永井少年は教会のオルガニストになるか牧師になるかしかなかったであろう。永井少年とそっくり同じ道を歩いたのが四歳年下の岡野少年、後の東京音楽学校教授岡野貞一であった。

二人の生涯をキリスト教の信仰というキーワードによって関係を辿って行くなら、永井少年と岡野少年の歩いた道は神の摂理であった、というような見方も出来よう。それはそれで一つの見方である。神の摂理であったのか、それとも唱歌という奇跡がなせる技であったのか、それは神のみぞ知るところである。

(注)

一、永井幸次『来し方八十年』大阪音楽短期大学楽友出版部、昭和二十九年、七頁。



安田 寛(やすだ・ひろし)

国立音楽大学大学院修士課程修了。現在奈良教育大学教育学部教授。著書に、『唱歌と十字架』(音楽之友社、一九九三年)、『日韓唱歌の源流』(音楽之友社、一九九九年)、『原典による近代唱歌集成』(編集代表、ビクターエンタテインメント、二〇〇〇年)、『唱歌』という奇跡 十二の物語』(文藝春秋、二〇〇三年)等がある。二〇〇一年第二十七回放送文化基金

賞番組部門個別分野「音響効果賞」を、二〇〇五年に第三十五回日本童謡賞特別賞を受賞。

「童謡・唱歌のふるさと鳥取」のあゆみ

— 「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールを中心に —

鳥取県西伯郡大山町立天山小学校教諭 宮内 美由紀

はじめに

一九八九年（平成元年）五月、「平成元年は鳥取県の文化の元年」という鳥取県のキャッチフレーズのもと、「童謡・唱歌のふるさと鳥取」と銘打った鳥取県の主導による童謡・唱歌の普及活動が開始された。鳥取県が、岡野貞一（一八七八～一九四一）、田村虎蔵（一八七三～一九四三）をはじめ、数々の童謡・唱歌の作曲家を輩出した県であることは今さらいうまでもない。このよな鳥取県の特徴を、地域の大切な文化として県民が享受しつつ、鳥取から全国に発信することが模索され始めたのである。それから十八年が経過した今日、童謡・唱歌を取り巻く環境は大きく変わり、その普及活動のあり方も曲がり角に差し掛かっている。

本稿は、一九八九年から現在に至るまでの鳥取県における童謡・唱歌の普及活動について概観する一環として、特に鳥取県の主導により展開された事業のうち、「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールとその後継事業の「とつとり童謡音楽祭—童謡フェスティバル」に焦点を当てて

論じたものである。

約二十年近くにわたって展開されてきた一連の取り組みも、その全体像を鳥瞰できる文献、資料が意外にない。もっとも断片的には、小冊子やパンフレットの類がたくさん発行されており、資料の数としては少なくはないが、それらを束ねた情報の集積、発信場所が必ずしも一元化されておらず、おもな情報を整理して活動の全体像を把握する必要がある。

なお、本稿は二〇〇七年（平成十九）一月島根大学大学院教育学研究科に提出した修士論文「鳥取県における童謡・唱歌の普及活動に関する研究」の第二章第一節を加筆修正し再構成したものである。

一、「童謡・唱歌のふるさと鳥取」と「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクール

鳥取県による童謡・唱歌の普及活動が目に見える形で本格的に始まったのは、一九八九年五月に鳥取県企画部文化国際課が中心となり、「童謡・唱歌のふるさと鳥取」企画実行委員会が発足してからである。その背景には、当時の西尾呂次鳥取県知事がこの構想の実現に大変意欲的であったということがある。

その活動のメイン事業として始まったのが、「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールである。これは「二十一世紀を担う子どもたちの夢をはぐくむ新しい童謡をつくり、普及させよう」というねらいの全国公募による創作童謡のコンクールで、プロ、アマチュアを問わず作詞、作曲された新作の童謡を募集し、審査を経て入賞作品を決定するというものである。

第一回目の作品応募総数は六七二曲、応募者総数は五二九名で、北海道から沖縄まで四十七都道府県全てから応募があった。多い順から東京都七十三名、鳥取県六十一名、大阪府三十八名、神奈川県三十五名、島根県二十五名、千葉県二十四名、兵庫県二十三名と、鳥取県外からの応募が大変多かった。また、年代別では最年長応募者が作詞八十八歳、作曲が九十三歳、最年少応募者は作詞が五歳、作曲が八歳と幅広い世代から応募があり、その内訳は十代が三十名、二十代が八十八名、三十代が九十八名、四十代が八十三名、五十代が八十五名、六十代が二十六名、七十代が二十六名と、二十代から五十代までは各年代ほぼ同じような数字になっていることが興味深い。職業別では、主婦の八十七名が最も多く、続いて会社員六十七名、教員六十二名、大学生四十九名、無職三十八名、音楽関係者三十八名の順となっており、幅広い職業の応募者があったことがわかる。

審査は、中田喜直、湯山昭、藤田圭雄の諸氏ら童謡の作曲や研究の分野での第一人者により行なわれた。最終審査会を兼ねた発表会は一九九〇年（平成二）一月二十一日に米子市公会堂で開催され、八〇〇人を超える聴衆が会場を埋めた。また、この模様は山陰放送でもテレビ放映され、童謡による鳥取県の地域おこしとして強く印象づけられるものとなった。

この時の「ふるさと」音楽賞（第一位入賞作品）は、熊谷本郷氏（広島県）作詞、高月啓充氏（岡山県）作曲の「コスモスの花」であった。以後、このコンクールから生まれた代表的な童謡として広く県民に親しまれてきている。

二、回を重ねたコンクール ― 入賞作品とその普及 ―

このコンクールは、その後二〇〇〇年度まで十二回にわたって続けられた。回を重ねるにつれて、応募作品数は増え続け、一九九三年（平成五）の第五回には一〇七二曲と一〇〇〇曲を超えた。一九九四年（平成六）の第六回は一四〇一曲、一九九八年（平成十）の第十回は一五四六曲、第十一、十二回とも一五〇〇曲前後で推移している。このように応募作品数だけみてもわずか数年で二倍以上、最終的には三倍近くに及ぶ伸びを示しており、このコンクールがいかに盛況だったかがわかる。また、同じ作詞者、作曲者が複数応募することから、応募者総数を見てみると、第一回は五二九名、第六回は九九一名、第十回は一〇六七名と、こちらも応募作品数にほぼ比例する形で伸びている。

入賞者の顔ぶれからコンクールを見てみよう。例えば第一回の第一位に相当する「ふるさと」音楽賞は、岡山県出身の高校教師（音楽ではなく、果樹園芸学が専門）高月啓充（当時五十三歳）氏が「コスモスの花」という曲で受賞した。また、「こどもの夢」という曲で優秀賞を受賞した矢田部宏氏は、児童向けの合唱曲の作曲家としてもよく知られた方である。このように、プロ、アマチュアの枠を超えて多数の応募があり、新しい童謡が作られたことはこのコンクールの大きな特徴である。ちなみに高月氏は、これを機に一日一作の童謡の作曲をライフワークとし、第五回、第七回と優秀賞、そして第十回にも「ふるさと」音楽賞を受賞し、常連入賞者となっている。最近でも二〇〇五年（平成十七）九月二十八日の『朝日新聞』で高月さんの活動が紹介されており、このコンクールが与えた影響の大きさが記されている。

「コスモスの花」など、このコンクールから生まれた曲を多くの人々に歌ってもらい、全国に向けて発信するという意図で、鳥取県と「童謡・唱歌のふるさと鳥取」企画実行委員会が各回の最優秀賞受賞曲の普及用楽譜集を作成、発行し、県内の学校をはじめ、全国各地の関係諸機関に送付した。特に、第一回から第六回までは、優秀賞以上の作品を、鳥取県で生まれた新しい童謡として、「ふるさと」音楽賞の普及のため、二部合唱、三部合唱、混声四部合唱に編曲し、一万部を配布した。また、「ふるさとの風にのせて」と題したCD・カセットテープもそれぞれ千本ずつ作成し、県内の各学校・保育園・幼稚園、市町村、図書館、主要交通機関、主要商店街、音楽団体、県外の童謡・唱歌取組団体などに配布した。

三、コンクールからフェスティバルへ

「ふるさと音楽賞」日本創作童謡コンクールに当てる県の予算も、県内外の人々の関心の高さに応える形で、第二回目以降は第一回の倍近い予算が継続して計上された。しかし一方では、その盛況を支える主催者側の負担は、年を重ねる毎に増していった。応募数が多くなればなるほど事務的な作業も大変で、さらに審査する側に至っては、一五〇〇を超える応募曲を審査しなくてはならず、その負担が相当なものになった。また、回数を重ね、たくさん曲はできてくるが、入賞曲をどのように普及し浸透させていくかという問題も出てきた。そして、やはり十年も経つと、同じことを繰り返すマンネリズムも少なからず生じてくる。当時は自治体財政の逼迫も今ほど大きく騒がれはしなかったが、今日のような状況の予兆はあったかもしれない。

結局、二〇〇一年（平成十三）一月に淀江町文化センターで行われた第十二回に当たる二〇〇〇年度の入賞作品発表会をもって、「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールは終止符を打った。この時の開催名は「とっとり童謡音楽祭&第十二回『ふるさと』音楽賞日本創作童謡コンクール入賞作品発表会」となっており、次節で述べる「とっとり童謡音楽祭」としての新しいスタイルへの移行も兼ねていた。

このように十二回を数えた「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールは、鳥取県の主導による童謡・唱歌の普及活動の最も初期の段階から始まった活動の象徴的な事業として、数多くの新しい童謡を生み出すとともに、県内外から高い関心を集め「童謡・唱歌のふるさと鳥取県」を全国的に印象づける上で大きな成果を上げたといつてよい。応募総数等のデータからみると、まさに鳥取県としては「うれしい悲鳴」であった。ただ、この盛況ぶりが逆にコンクール存続の足枷となってしまうことは皮肉な結果であり、コンクールの廃止を惜しむ声が筆者の周囲でも多かった。

四、「とっとり童謡音楽祭——童謡フェスティバル」

「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールは、翌二〇〇一年度から「とっとり童謡音楽祭——童謡フェスティバル」と衣替えし、その意図もそれまでの創作中心から、その蓄積を普及していくことに移行し、今まである童謡・唱歌を歌っていくという方向に変わった。歌唱曲については、子どもから大人までみんなで楽しめる曲とし、『童謡・唱歌のふるさと鳥取』こどもの歌名

曲集』及び第一回く第六回の「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクール優秀作品合唱曲集掲載曲から必ず一曲以上を選曲することになった。

二〇〇一年度の第一回、二〇〇二年度の第二回とも岩美町で開催された。岩美町は、田村虎蔵の生誕の地として、町民主体の実行委員会を中心に童謡・唱歌の普及活動が盛んであり、一九八八年（昭和六一）から「ふるさと童謡まつり——いわみ音楽祭——」を開催する他、町内の有線放送に「花さかじじい」や「一寸法師」の旋律を用いるなど、町をあげて熱心な取り組みを展開している。

二〇〇一年は、同年国民文化祭が鳥取県で開催されたことと重なり、「プレ国民文化祭 夢フェスタとっとり」と「いわみ音楽祭」を兼ね、鳥取県、岩美町他の共催により、同年九月三十日に岩美町立南小学校・体育館で開催された。県外からの参加も含め千人の来場者で賑わったという。二〇〇二年（平成十四）十月には特別に同年本番の「国民文化祭 夢フェスタとっとり」の一環としての「童謡・唱歌フェスティバル」が「童謡・唱歌で結ぶ心のかげはしく田村虎蔵」をテーマに掲げ、岩美町を会場に、文化庁、鳥取県、岩美町他の共催で別途開催された。

五、とっとり県民カレッジとして継続

「とっとり童謡音楽祭——童謡フェスティバル」は、二〇〇一年度と二〇〇三年度以降は、とっとり県民カレッジ連携講座の一環として開催されるようになった。二〇〇二年度は鳥取県民文化会館梨花ホール（鳥取市）、二〇〇三年度は倉吉未来中心（倉吉市）、二〇〇四年度は米子コン

ペンションセンター（米子市）、二〇〇五年度は鳥取県民文化会館梨花ホールと鳥取県の東、中、西部を巡回する形で開催されている。

その目的は「鳥取県ゆかりの童謡・唱歌及び『ふるさと』音楽賞日本創作童謡コンクール受賞曲の普及と、童謡・唱歌に親しんでいる子どもたちに発表の場を設けること」であり、『子どもたちに、鳥取県ゆかりの童謡・唱歌を歌い継いでほしい。』との思いから、出演者は、子どもにこだわって出演団体の募集を行い……と、十二年間の創作童謡の蓄積をいかに活用するか、そして子どもたちがいかに普及を図るか、というスタンスに大きく方針転換されている。

実際のフェスティバルは、鳥取県内や近県で音楽活動を行っている子どもを中心とした団体の地元出演者のステージと、中央から招いたプロの童謡歌手や音楽家のステージ、さらに両者の共演で構成され、社団法人日本童謡協会や専門の企画制作会社が制作に関わっている場合が多いようである。

おわりに

「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールから「とつとり童謡音楽祭―童謡フェスティバル」へと引き継がれた一連の事業は、一九八九年から二〇〇五年まで十七年にわたり続けられてきた。「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクールでは数多くの入賞作品も生まれたが、それ以上へのベ一三、四二五曲の新しい童謡が作られ、寄せられたことは、童謡への関心を高め、「童謡・唱歌のふるさと鳥取」を全国発信する上で、何よりの大きな意味があったと思われる。そし

て「とつとり童謡音楽祭——童謡フェスティバル」では、新しい童謡の「生産」と「蓄積」から、それらの「活用」と「普及」へと事業のめざすものが大きく転換した。

ただ、今後「活用」と「普及」を図る上で、はたしてこれまでのイベント中心の事業のあり方についての程度の可能性があるかを検討しなければならないであろう。また、人々に歌い継がれる童謡とは、ほとんどの創作童謡が自然に淘汰されていく中で、ほんとうにわずかでである。それらは人々の心に響く何かをもっており、特定の作品を意図的に普及させようとしても思いどおりにはいかないことは明らかである。新しい童謡の種をまくことは必要であるが、芽が出て育っていくかは童謡を享受する人々たちが自然に判断していくことなのである。

ところで十七年間続いてきたこの事業も二〇〇六年度のアナウンスは、本稿脱稿の二〇〇七年一月末の時点でまだなく、その成り行きを危惧しているところである。

主要参考文献

- ・鳥取県、「童謡・唱歌のふるさと鳥取」企画実行委員会編集・発行『ふるさと』音楽賞日本創作童謡コンクール優秀作品合唱曲集 第一回～第六回』発行年不明
- ・鳥取県、「童謡・唱歌のふるさと鳥取」企画実行委員会編集・発行『童謡・唱歌のふるさと鳥取』こどものうた名曲集』二〇〇四
- ・『朝日新聞』二〇〇五年九月二十八日付
- ・「とっとり童謡音楽祭」童謡フェスティバル」参加者募集要項」二〇〇五「童謡・唱歌のふるさと鳥取」企画実行委員会
- ・「とっとり童謡音楽祭」童謡フェスティバル」プログラム冊子 平成十二年度～平成十七年度

謝辞：鳥取県文化観光局文化政策課の岡本圭司氏、鳥取県教育委員会体育保健課の山崎嘉彦氏、鳥取県東京事務所の吉井美和子氏、わらべ館の川崎香苗氏、岩美町の榎本武利町長、岩美町自立推進課の松本享子氏には貴重な資料、情報等提供をいただきました。感謝申し上げます。

鳥取藩士が集めたわらべうた

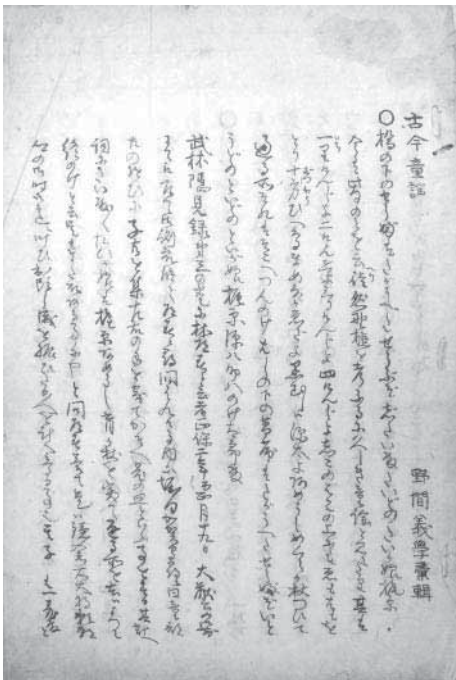
— 日本最古の童謡集『筆のかす』と『古今童謡』 —

鳥取県立博物館 学芸員 大 嶋 陽 一

わらべ館 専門員 川 崎 香 苗

一、『古今童謡』の発見

平成十八（二〇〇六）年、『筆のかす』の写本（抄録本）である『古今童謡』を、鳥取県立博物館が入手しました。『筆のかす』は、鳥取藩士野間義学^{（注1）}が著述したとされる、わらべうたを集めた文献です。昭和十二（一九三七）年から十三（一九三八）年にかけて鳥取の民俗雑誌『因伯民談』で、岩田勝市氏（民俗研究者）が『筆



表紙

のかす』の写本の端本『筆のかす 今昔近代童謡巻拾』の一部を翻刻・紹介したことによって、その存在が知られていました。^(注1)しかし、岩田氏が所蔵していたと思われる写本はその後散逸し、『筆のかす』は原本・写本とも現存しない幻の資料となっていました。今回見つかった『古今童謡』は、その写本(抄録本)であるとはいえ、注目すべき点が三つあります。

まず、その歴史的価値です。わらべうたを集めた江戸時代の文献としては、釈行智『童謡集』〔文政二(一八一九)年頃〕や小寺玉晃『尾張参河童遊集』〔天保二(一八三二)年〕などが有名ですが、『筆のかす』はそれらよりも古く、現存する童謡集では最古のものと言われています。^(注2)わらべうたの研究者である尾原昭夫氏や酒井董美氏が、『筆のかす』の重要性に着目し、かねてからその情報を探しておられました。

次に、内容そのものの価値です。酒井董美氏の著書『山陰のわらべ歌』(三弥井書店 二〇〇四)によると、『古今童謡』に含まれている歌のうちの数曲は、現代、少なくとも近年まで歌われていたことがわかります。つまり『古今童謡』に収録されている歌と、近年まで歌い継がれた歌を比較することによって、その変遷を知ることが出来るのです。

最後に、『古今童謡』の研究を進めることによつて、広く『筆のかす』への関心を高め、『因伯民談』だけでは知り得なかつた新しい情報が、明らかにになると期待できる点です。今回の発見が、『筆のかす』の原本や新たな写本発見の報につながることを願つてやみません。

(注)

一、野間義学 元禄五年〜享保十七年(一六九二〜一七三二)

二、岩田勝市『童謡の採集―鳥取地方を中心にして(明治以前)』(因伯民談 第三巻第五号および第四巻第一号)一九三七、一九三八

三、尾原昭夫『近世童謡童遊集 日本わらべ歌全集27』、柳原書店 一九九一

二、『古今童謡』と野間義学

①雪やこんこ、あられやこんこ、深山の奥のたびらこや、こんここんこ

※たびらこ…牡丹雪のこと（大嶋註）

②猪のしし、鹿のしし喰たいか、門徒坊主に成たいか（繰り返し）

※門徒坊主…浄土真宗の信徒

③大山やまの雪ころびころびや

みなさんは、この三つのわらべうたを聞いてどのような場面を想像されますか。雪が降る冬の寒い日进行い浮かべる方、あるいは、雪の降る中はしゃぐ子どもたちの姿を想像される方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これらのわらべうたは、今をさかのぼること約三〇〇年、享保年間（一七一六〜三六）以前の因幡地方で歌われていたもので、今回紹介する『古今童謡』に収録されています。

『古今童謡』は、前述のとおり、鳥取藩士野間義学が記した『筆のかす』の現存する唯一の写本もしくは抄録本です。『古今童謡』には、五十以上のわらべうたや子どもたちの遊びが収録されるほか（表参照）、遊び方の挿絵も八か所に描かれています（「親はとるとも」の図参照）。



親はとるともの図

「親はとるともの」原文の意訳

先に一人立っている子どもを“親”と決め、親の帯に取り付くものを“子”と定め、段々と帯へ取り付くようにする。向こうの方に一人立っている子どもがおり、これが“子”を捕まえようとする。“親”となったものは、捕まえさせないようにし、“子”になったものは、“親”の陰に隠れる。このとき“子”がいう詞「親はとるともの、この子は得とるまい」

同書の記載の特徴は、各わらべうたに野間による解説や考証が付されている点です。例えば、先ほど紹介した①のわらべうたには、“雪・あられが降る冬の寒い日にうたう”とされ、また、本歌のもとになった歌が吉田兼好『徒然草』一八一段の「ふれふれ粉雪、たんぼの粉雪」ではないかと考証が加えられています。また、②の場合、“雪を固めて竹に突き刺して二人で荷ぎながらうたう”と、③は“雪を転がしながらうたう”とされています。これらの解説によって、収録されたわらべうたがどのような場面で歌われたかを知ることができます。

次に、『筆のかす』（『古今童謡』）の著者である野間義学（宗蔵）とはいかなる人物だったのでしょうか。野間義学は、元禄五（一六九二）年、五〇〇石の知行地を持つ野間家の五代目として、

鳥取城下に生まれました。元禄十五（一七〇二）年、幼くして家督を相続したのち、徳川吉宗が八代將軍に就任した際の祝賀の使者や江戸番頭（江戸詰の藩士を統括する職）などを勤めました。享保十七（一七三二）年に若くしてこの世を去りました。

しかし、この野間は、「頗る好古の人」（『因府年表』）、すなわち歴史家として知られた人物で、様々な稿本類を著した学者でもありました。それらの稿本は、藩主池田家や家臣団の歴史や逸話といった、当時の支配階層である「武家」の事蹟をまとめたものが多いのですが、一方で、鳥取城下やその周辺部の庶民、とりわけ「民家」に農民に残された古い言葉や伝承を記録していることが注目されます。野間は、歴史研究のため城下周辺の農村を実際に訪問し、調査するなかで、農民の生活の中に残る古い文化を発見し、それらに強い興味を覚えたようです。このような興味関心のもとで生み出されたのが、因幡地方のわらべうたを収集した『筆のかす』（『古今童謡』）と言えるでしょう。

いづれにしても、同書は、江戸時代中頃の鳥取の農民、とくに子どもたちの生活文化を垣間見ることができると大変貴重なもので、今後も多分野にわたる研究に活用できる資料だと思います。より多くの方に活用いただくため、『鳥取県立博物館研究報告』第四十四号に、「野間義学（宗蔵）著『古今童謡』について」と題し、内容の検討と資料翻刻を掲載する予定です。

一、『古今童謡』の発見は、川崎香苗（わらべ館 専門員）、

二、『古今童謡』と野間義学は、大嶋陽一（鳥取県立博物館 学芸員）が担当しました。

表 『古今童謡』所収一覧

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
座頭の坊のしりに	地頭殿鼻の先	大山やまの	猪のしし鹿のしし	雪やこんこ	向うの山に	お月さまなんぼ	すわすわ	鷺ままいろ	棹になれ	跡のからす	からすからす	鷺にや尾かない	二郎よ太郎よ	天が紅	おじゃれ子ともたち	橋の菖蒲は	歌い出し文言
○		○	○		○	○			○			○	○		○	○	

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	
爺が髭は	どっちの髪も	こっちの手は金に	ありの道はどう行こう	芋虫かわらけ	なれなれ権太郎	でんでんでの虫	起き起き小石	加賀の鏡屋の	今日はなんの日	縁の下のごもく	烏のまねを	鍛冶屋の職は	おふり様の	歯抜けばば助	あいつが面に	あの子はどこの子	歌い出し文言
	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	
かあごかあご	地頭様手車	雀の酒盛り	大やぶ小やぶ	くいにすいに	いちくたちく	かくれ子	草履かくし	狼事	鬼々事	親はとも(と)とも	中の中の小仏	いれいれごんぼ(二人)	いれいれごんぼ	ころころ馬の子	地頭どの米つき	歌い出し文言
	○		○		○					○	○		○	○	○	

表中の○は岩田勝市が採録した『筆のかす』にも同様のわらべうた等が含まれるもの。

岡野貞一の作曲作品は日本の宝!!

鈴木 恵 一

一、岡野貞一の作曲をもっと誇ろう!!

「ふるさと」「おぼろ月夜」「春が来た」「春の小川」「もみじ」。これらは九十年も前から小学校の音楽の必修曲。なんとすべて鳥取生まれの岡野貞一の作曲である。驚くべきことと共に、鳥取県民はこのことを誇りにすべきであろう。

特に「ふるさと」は長野オリンピックで歌われてから世界の歌になった。またわかとり国体、全国童謡唱歌サミットでも歌われ、北島三郎、モーニング娘。からゴスペラーズなどあらゆる歌手にも歌われる歌となり、まさに全国的な国民歌となっている。なぜだろうか？

二、岡野の曲はなぜ人に親しまれるのか？

第一に高野辰之の詞が日本人の感性に訴え、自然の美しさを讃えた曲が多く、子どもの心に「ふるさと志向」を芽生えさせ、大人になっても忘れ得ない曲となったこと。第二に岡野がクリスチャンで讃美歌の精神性により品格があり、加えて親しみ易く覚え易い曲ともなっている。第三に旋律の反復、曲の盛り上げ方がすばらしいなど作曲上の工夫がほどこされている。

三、ふるさと鳥取はすばらしい作曲家を育てた!!

岡野貞一は明治十一年鳥取市古市ふるいちに生まれ七才で父の死去に伴い吉方町に移る。吉方学校に学び、放課後は近くの袋川ふくがわや源太夫山げんたいやまで遊ぶ。次いで上級学校因幡いなば高等小学校に学び近くの西町に移る。姉が生計を立てるため、鳥取教会関係の仕事。姉の影響でキリスト教音楽に惹かれ、同級生の兄永井幸次の奏するオルガンや讚美歌に感動。洗礼を受け十五才の時姉の嫁ぎ先岡山に移る。岡山教会で音楽の才能を見出され、東京音楽学校へ進学。卒業と共に母校の教師となる。教師の仕事に加え文部省唱歌編さんという大仕事も加わり、その上音楽教員検定試験官、講習会指導も重なった。また教職以外、本郷中央教会のオルガニスト、聖歌隊指導も加わったが、不平不満を全くもたさず四十年間精進し昭和十六年六十三才で歿。今、岡野の偉業を顕彰する「ふるさと」音楽碑は久松山ひさかきやまのふもとの公園で道行く人々を暖かく見守っているかの如く建つ。岡野の名曲はいつまでも忘れられることなく心の歌として残るであろう。



鈴木 恵一 (すずき けいいち)

わらべ館唱歌教師。二〇〇五年、三十五年間の調査研究を基にした『岡野貞一とその名曲』を出版。六つの合唱団の指導を行うほか、とっとり童謡唱歌の会会長や日本のふるさと音楽祭実行委員会会長などとして、幅広く活動している。

鳥取教会と永井幸次・岡野貞一

大前 幸 正

鳥取市西町にある日本基督教団鳥取教会は、明治二十三（一八九〇）年二月二十三日の創立で注一す。因幡におけるキリスト教文化の発祥と言っても過言ではありません。今日の様々な産業、教育、政治、福祉、文化等のリーダーとなった人（糸賀一雄注二・澤田廉三注三・尾崎信太郎注四等）を輩出しています。音楽界の巨匠永井幸次氏、岡野貞一氏も鳥取教会とは深い関係があります。次の二節は、鳥取教会の正式な会員記録です。

*永井幸次 修ノ長男 因幡国邑美郡西町百六十六番地 明治七年二月生

明治廿年三月十三日上代教師ヨリ受洗 全廿一年九月九日作州落合教会ヨリ本會ニ加入、全廿七年十一月二十四日東京下谷区福音教会へ転ス

*岡埜貞一（野） 鳥取市西町百五十七番地 明治十一年二月生

明治廿五年九月廿五日セベランス (Severance 1890-1892) 教師ヨリ受洗

（傍注筆者）

永井幸次の父永井修、母トシも明治二十一（一八八八）年に洗礼を受けた教会員でした。幸次がロンドン宣教師からオルガンを習っていたことが、岡野貞一を触発し、オルガンに興味をも

ったという話は『鳥取県子どものための伝記 第二巻』（鳥取県子どものための伝記編、昭和六十三年発行）岡野貞一の項に詳しく記されています。

教会とオルガンについてみると、日本におけるオルガンの歴史は十六世紀にさかのぼります。イエズス会のザビエルが伝道の有効な手段としてヴァイオリンとオルガンをういたと言われています。つまり、讚美歌の伴奏用としてリードオルガンが用いられたのです。この頃は「チェストオルガン」と呼ばれる箱型の小型オルガンでした。このリードオルガンが広く普及し始めたのは明治時代で、いち早く教会やミッションスクールで、外国人宣教師らによつて独自に音楽教育がおこなわれました。この流れの中に永井幸次も岡野貞一も関わりを持ったのです。

リードオルガンについてはいろいろな話がありますが、紙数の関係で書けません。私自身も昭和三十五（一九六〇）年に牧師になり、今日まで足踏みリードオルガンの普及のために演奏活動をしております。忘れ去られたリードオルガンの素晴らしさを分かち合いたいものです。



(注)

- 一、教会の活動は明治十二（一八八〇）年から始まっている。（『鳥取教会七十年史』昭和三十七年）
- 二、福祉教育の先駆者、子どものための療育施設「近江学園」の創始者。
- 三、国連の初代日本大使。
- 四、鳥取育児院（現・鳥取こども学園）の創立者。

大前幸正（おおまえ・ゆきまさ）

日本基督教団 鳥取教会 牧師
学校法人 愛真幼稚園 理事長

資料収集委員会の発足と活動

資料収集委員会委員長 白石由美子

資料収集委員会は、平成十七年のわらべ館開館十周年記念式典での片山善博鳥取県知事の提言を機に発足した。メンバーは鳥取大学助教授西岡千秋氏、島根大学助教授藤井浩基氏、鳥取市立福部中学校校長中田達也氏、鳥取短期大学教授白石由美子の四名で構成された。委員会は平成十七年度に三回開催され、基本方針は「ミュージアム機能を強化し、童謡・唱歌の拠点として全国に発信する施設を目指す」と定められた。具体的な方策として

- ① 童謡・唱歌に関する文献・資料を広く調査・収集しそれを基に研究をすすめる。
- ② 小学校・中学校の音楽教科書、並びに教材を収集する。
- ③ 童謡・唱歌に関する研究・情報誌を作成し、それを全国へ発信する。
- ④ 蔵書リストを公開して、一般の人や研究者がわらべ館の資料を活用できるようにする。

以上の四項目が提案され承認された。これらは今後のわらべ館の将来的な展望にも繋がる重要な役割を担うものである。

平成十八年度委員会はこれまでに二回開催され、前年度の方策を実行に移すための活動として、「学校音楽教科書の収集」と「研究情報誌の創刊」の二項目を柱に据えることにした。

教科書収集では新聞紙上にも取り上げられて反響を呼び、地域の方々や、各方面から多大な協力を得て次々と貴重な資料が集まっている。教科書は誰もが手にし、学んだものである。いづれ当館にてその成果をご覧いただける日が来ると思う。

研究情報誌「音夢」は特別寄稿をいただいた安田寛氏をはじめ、専門分野でご活躍の方々の執筆により創刊の運びとなった。研究情報誌としては小規模の冊子ではあるが、関係者の皆様に必要とされる情報誌を目指したい。

さらに今後は、童謡・唱歌研究の最新動向に関する文献・資料収集の調査・整理をすすめる、童謡・唱歌ミュージアムの全国ネットワーク化を念頭に置いた活動の展開が必要と思われる。

音楽教科書収集の報告

わらべ館 専門員 川 崎 香 苗

わらべ館では、平成十七年度に発足した童謡・唱歌資料収集委員会で収集対象について議論、検討した結果、音楽の教科書を幅広く収集することになった。教科書は、童謡・唱歌の歩みをたどる上で貴重な資料である。だが、今手元にある教科書や、家・学校に眠っている教科書のほとんどは、いづれ処分され、気づいた時には何も残っていないということにもなりかねない。喫緊の課題として、古いものから新しいものまで現在残っているさまざまな年代の教科書を収集し、アーカイブを構築する事業に取り組むこととなった。

具体的な取り組みとしては、館外にも広く教科書の寄贈を呼びかけるため、

- ① 県内の小・中学校へ協力を呼びかける文書を送付
- ② わらべ館ホームページで教科書収集を告知
- ③ 地元の新聞社に「教科書収集中」と題した記事を掲載などの方法で広報した。

その結果、当館の唱歌教師や資料収集委員のみならず、県内小・中学校や一般の方々から、多くの教科書が寄せられた。なかでも、鈴木恵一氏（当館唱歌教師）から二百点に及ぶ資料の寄贈

を受けたことは、マスコミ各社に大きく取り上げられ、米子市や日野郡など県西部の方々からの反響につながった。

平成十八年度に寄贈を受けた三三三三点のうち、大部分は戦後の教科書だったが、戦前の希少な資料もあった。中でも岡野貞一（鳥取市出身）が編集した『中等教育 唱歌新教材』（共益商社発行、大正十四年）を入手できたことは予想外であり、期待以上の成果であった。

他にも、ワークブック等の副教材や、CD等の視聴覚資料など、教科書だけでなく、音楽教育について研究する上で必要となる重要な資料を多数収集することが出来た。

これらは、今後調査を重ね、当館の常設展・企画展で活用していく予定である。

この場をお借りして、資料収集にご協力くださった方々に深く感謝申し上げます。



わらべ館ホームページより

■企画展

第一回「岡野貞一とその名曲」

■期間 平成十八年四月一日(土)～五月七日(日)

■場所 一階展示室「鳥取の音楽家たち」の部屋



講演会の開催(三六頁参照)に併せて、同タイトルの企画展を開催しました。岡野の人物紹介は、解説パネルを中心に、岡野が作曲した唱歌については、写真パネルと展示資料を中心に、構成しました。

〈解説パネル〉

一、岡野貞一とは

〔キリスト教徒／東京音楽学校の教授／唱歌へんさん編纂委員〕

二、岡野をめぐる人々

〔永井幸次ながいこうじ／田村虎蔵たむらとらぞう／高野辰之たかのたつゆき〕

〈写真パネル〉

歌碑

〔春が来た／ふるさと／おぼろ月夜(鳥取・長野)／春の小川〕

〈展示資料〉

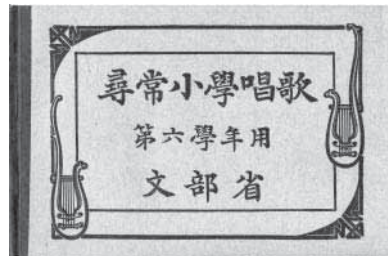
- ・『尋常小学唱歌（六）』（大正三年、文部省発行）
ほか 明治・大正時代の楽譜十二点
- ・『小学生の音楽6』（平成十七年、教育芸術社発行）
ほか 現在小学校で使われている教科書六
点
- ・CD「FURUSATO」（平成六年、キングレコード）
ほか 「故郷」が収録されているCD六
点

第二回 「唱歌になったドイツのうた」

■期間 平成十八年六月二十二日（木）～九月十九日（火）

■場所 一階 木造教室前渡り廊下

この企画展は、おもちゃに関する企画展「ドイツと鳥取 おはなしの世界」と同時開催しました。わらべ館が姉妹館提携しているヘッセン人形博物館（ドイツ）との交流十一年目、鳥取市とハーナウ市の提携五周年を記念し、サッカーW杯で世界的に注目の集まったドイツをテーマにしたもので、私たちに親しまれているドイツ生まれの歌を紹介しました。





また、企画展関連イベントとして「うたとおはなしの会」を開催。「ちようちよう」などの歌をドイツ語と日本語で歌い、ペープサート「ブレーメンの音楽隊」や鳥取の民話を楽しみました。

公演名 うたとおはなしの会

日時 平成十八年九月二日(土) 十五時～十六時

出演者 第一部 原田彰さん(当館唱歌教師)

川崎香苗(当館職員)

第二部 中嶋須美子さん(民話の語り部)

醇風小学校はあとふる委員の五・六年生

入場者 百名

曲名	図書名	発行
蝶々	『小学唱歌集 初編』	明治十五年
ちようちよう	『おんがくのほん1』	昭和二十六年
LIGHTLY ROW	『昭和中等音楽教科書』	昭和六年
ロオレライ	『女声唱歌』	明治四十二年
愛らしき花	『少年唱歌七巻』	明治四十三年
ブラームスの子守歌	『改訂女子音楽教科書第二編』	昭和十四年
毬	『検定唱歌集 尋常科』	大正十五年
こぎつね	『小学校音楽 音楽のおくりもの2』	平成十四年

ほか

第三回 海を渡ったトランク

田村虎蔵たむらとらぞう 五八五日間の欧米視察

■期間 平成十八年十一月九日(木)～平成十九年一月八日(月・祝)

■場所 一階展示室 「鳥取の音楽家たち」の部屋



郷土の音楽家、田村虎蔵。音楽教育者として活躍中だった田村は、大正十一年、文部省から欧米視察を命じられました。五八五日間に及ぶ視察の様子を初公開となったトランクなどの資料とともに、紹介しました。

〈展示資料〉

・トランク (大・小)

・新聞記事

「亀さんや桃太郎のおぢさんが お子さんたちの為に洋行」

(東京朝日新聞)

「もしもし亀よの田村氏が世界行脚」(読売新聞)

・「洋行日誌」三冊

・「洋行アルバム」四冊ほか



■ 講演会

「岡野貞一とその名曲」ふるさと鳥取での少年時代」



[日 時] 平成18年4月22日(土) 14時～15時30分

[場 所] いべんとほーる

[講 師] 鈴木恵一氏(わらべ館唱歌教師、
『岡野貞一とその名曲』著者)

[参加者] 205名

今年度は、郷土の音楽家 岡野貞一を取り上げました。内容は、岡野が鳥取教会へ通ったこと、永井幸次(鳥取市出身の音楽教育家・大阪音楽大学創立者)に影響を受けたことなど、鳥取での少年時代に関するエピソードを中心にした講演でした。お話の合間には講師のアコーディオン伴奏に合わせて参加者全員が合唱する時間もあり、「桃太郎」、「春が来た」、「おぼろ月夜」など、岡野による名曲のほか、岡野が愛唱した讃美歌などを歌いました。参加者からは「楽しい会だった」、「是非このような企画を続けて欲しい」といった感想が寄せられました。

■ 追悼展

「高木東六 生涯と業績」



平成十八年八月二十五日に他界された、高木氏の追悼展を行いました。高木氏は明治三十七年、米子市生まれ。百二歳で他界するまで、日本を代表する音楽家として活躍しました。高木氏の年表をパネル展示したほか、「水色のワルツ」のレコード、オペラ「春香」のピアノスコア、童謡「チツプタツプロンロン」の楽譜などを展示し、氏の精力的で幅広い活動を振り返りました。

また高木氏業績を記念して「追悼コンサート」も開催しました。生前、高木氏と親交のあった白石由美子さんと藤井浩基さんが、高木氏とのエピソードを交えながら、作品を披露し紹介しました。



「追悼コンサート」

[日時] 平成18年10月8日(日) 14時～15時
[場所] いべんとほーる
[出演] 白石由美子(ソプラノ・鳥取短期大学教授)
藤井浩基(ピアノと解説・島根大学助教授)
[参加者] 147名

□ イベント

唱歌教室

木造校舎で大正時代の衣装をまとった先生が、生徒（来館者）に唱歌指導を行う唱歌教室を実施しました。



〔定時開催〕

左記の期間の毎週土曜日（夏編は左記の期間）

春 編（4／1、8） 初夏編（5／6、6／24）

夏 編（8／13、16） 秋 編（9／2、11／25）

春 編（3／24、31）

〔臨時開催〕希望に応じ、予約の上、随時

なつかしの

わらべ俱樂部

60歳以上の方を対象に、懐かしい童謡・唱歌等やレクリエーションを楽しむ「なつかしのわらべ俱樂部」を実施しました。



〔年4回開催〕

春 編（5／9）

秋 編（10／6）

夏 編（7／7）

冬 編（2／27）

大正の部屋コンサート

一般の方に1階大正の部屋を会場として提供し、童謡・唱歌等を含むコンサートを実施しました。



- 4 / 2 「笛は歌う」(鳥取りコーダー・コンサート)
- 6 / 10 「たまりのコンサート」(たまりの)
- 6 / 18 「さわやかdayコンサート」(さわやかday)
- 7 / 17 「笛は歌う」(鳥取りコーダー・コンサート)
- 9 / 24 「三好芳子さんとちいさな音楽会」
(三好芳子さん、ピアノ教室の生徒さん)
- 11 / 3 「笛は歌う」(鳥取りコーダー・コンサート)
- 12 / 10 「日だまりコンサート オブ アドベント」
(小椋美香子さん、稲毛麻紀さん)
- 3 / 4 「春ー童謡・唱歌百景からー」
(当館職員 川崎香苗、久保智美)

ファミリー・コンサート

プロの歌手等を招き、子どもから大人までが楽しめる歌やステージ等のコンサートを実施しました。



- 7 / 2 杉田あきひろおにいさんの
「おやこでふれあいコンサート」
- 11 / 23 ワクワクさんととももの
「楽器とおもちやつくってあそぼ」

ふれあいステージ

親子で楽しめ、子どもの芸術に対する感性を育めるような、県内のアマチュア芸術活動家等によるコンサート、演劇等を実施しました。



5 / 13・14 演劇「じごくのそうべえ」
9 / 17・18 「アップルティー」コンサート
12 / 16・17 「Sou Jam」クリスマス・コンサート
2 / 10・12 「鉄道の世界へようこそ」

おはなしと

わらべうたあそび

絵本の朗読やわらべうたあそびを楽しみながら、親子のコミュニケーションを図り、子どもの社会性を育む、おはなしとわらべうたあそびを実施しました。



毎月第2、4週の土曜日

わらべ館

童謡コンサート

童謡・唱歌の啓発普及を目指し、県内外の教育機関や社会福祉施設、社会教育施設等で、わらべ館童謡唱歌推進員（歌手及び伴奏者）による童謡コンサートを実施しました。



- 7 / 12 鳥取市立浜村保育園
- 7 / 12 岩美町中央公民館
- 7 / 13 米子市福米東公民館
- 9 / 9 松戸市民会館（千葉県）
- 9 / 17 石谷家住宅
- 10 / 5 鳥取第一幼稚園
- 11 / 11 めぐるパーシモンホール（東京都）
- 11 / 13 米子市文化ホール
- 11 / 28 米子市住吉公民館
- 1 / 21 倉吉交流プラザ
- 3 / 1021 介護支援センターさかい幸朋苑

子どもの歌に関する施設紹介コーナー

ここでは、子どもの歌をテーマにした施設の紹介をします。
今回は、発行元である「わらべ館」です。

わらべ館



概要

■開館

平成七年七月七日

■館の性格

わらべ館は、童謡をテーマとする県立童謡館とおもちゃをテーマとする鳥取世界おもちゃ館との二つの施設からなる複合文化施設として、鳥取県と鳥取市の協力の下に建設されました。

「わらべ館」は二つの施設を統合する名称として、一般公募により選ばれたものです。

■運営

財団法人 鳥取童謡・おもちゃ館

■建築の特徴

- ・展示棟、ホール棟、施設管理棟の三棟からなる。鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造）地上三階、地下一階。
- ・街並み保存のため、施設管理棟は昭和五年に建設された旧県立図書館の外観を復元したものです。

■利用案内

- ・開館時間／午前九時～午後五時（最終入館は午後四時半）
- ・休館日／毎月第三水曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始（十二月二十九日～一月一日）
- ・入館料／一般五百円（二十名以上の団体は二割引）
小中高生、友の会会員、幼児及び障害者、介護保険の要介護者、要支援者とその介護者の方は無料。
- ・駐車場／屋外駐車場（乗用車百十一台、大型バス五台、身障者用三台）
地下駐車場（乗用車二十台）
- ・問合せ先／〒六八〇・〇〇二二 鳥取市西町三丁目二〇二
TEL 〇八五七（二二）七〇七〇 FAX 〇八五七（二二）三〇三〇
ホームページアドレス <http://www.warabe.or.jp>
E-mail : warabekan@warabe.or.jp

事業内容

わらべ館では童謡とおもちゃをテーマとした様々な事業を実施しています。

- 企画実施事業
 - 「春まつり」、「夏まつり」といった総合イベントの開催
 - 童謡・唱歌とおもちゃに関する企画展の実施 ほか
- 調査研究事業
- 童謡・唱歌とおもちゃに関する資料収集と調査研究の実施
- 啓発普及事業
 - 広報事業、機関誌の発行、ボランティア活動の推進など

館内各コーナーの紹介

館内にある主なコーナーを紹介いたします。

1階

- エントランスモニュメント
- わらべ館の入り口で、機関車「わらべ号」がお客様をお迎え。
- レストスペース



エントランスモニュメント

自動販売機を備えた休憩コーナー。

■展示室

一階童謡の部屋ではわらべうた・唱歌・童謡からアニメソングまで、幅広く子どもの歌を紹介。

【茅ぶき民家】

民家の窓には、子ども達がわらべうたを歌いながらあそぶ姿が影絵で映し出されます。

【木造教室】

昭和初期の尋常小学校を再現した教室。教室の窓では、スライド「子ども時代」が上映されています。ここでは定期的に「唱歌教室」というイベントを開催します。

【鳥取の音楽家たち】

岡野貞一、田村虎蔵、永井幸次など、鳥取ゆかりの音楽家について紹介するコーナー。

【大正の部屋】

童謡の発展に貢献した作詞家、作曲家等を紹介しています。

【新しいこどものうた】

カラオケセットが設置しており、アニメソングを歌って楽しめます。



鳥取の音楽家たちの部屋



木造教室

2階

■ライブラリー

童謡とおもちゃに関する書籍の閲覧や、ビデオの鑑賞が可能。

■展示室

いろいろなおもちゃや音に触れる体験型の展示。

【Dr.トリトルのおもちゃ研究所】

テーブルの上におもちゃがたくさん。ぜひ触って遊んでください。

【あそぼう広場】

ぬいぐるみと知育玩具のコーナーや、音と触れ合うコーナー。

3階

展示室には十四のコーナーがあり、日本や海外のおもちゃ約二千点を展示。

■正義と冒険

テレビ番組などで活躍したヒーローのおもちゃを中心に展示。

■夢とあこがれ

着せ替え人形、台所セットのおもちゃなどを中心に展示。



3階



2階

■ギャラリー童夢

定期的にテーマを選んで、わらべ館の所蔵するおもちゃや遊びを企画展で紹介。

■姉妹館交流コーナー

姉妹館であるドイツ・ハーナウ市ヘッセン人形博物館から贈られた貴重な資料を展示。

その他

■いべんとほーる

わらべ館主催のイベントの拠点として、また地域文化の振興のために幅広く利用されている多目的ホール。

■からくり時計

いべんとほーる棟の壁面に設置された、直径二・四メートルの時計。午前九時から午後五時まで一時間おきに演奏。岡野貞一、田村虎藏などの曲とともに、大黒さまやきんたろうなど人形の楽隊が登場します。（演奏時間 四分三十秒）



からくり時計



3階 なつかしいおもちゃがいっぱい

わらべ館では県の政策としてミュージアム機能の強化が求められたことから、資料収集委員会が組織され、私もその末席を汚すこととなった。しかし、昨今の逼迫した地方財政下では、わらべ館が資料収集に当てることができる予算も限られている。潤沢な予算で珍しい「お宝」を購入する旧来の発想は通用しない。

委員会では、今の「お宝」を買うのではなく、未来の「お宝」を今のうちに集めるとともに、「お宝」を自らで作ろうと発想を転換した。白石委員長が書いたように、それが教科書収集と本誌発刊である。急遽、資料収集委員会は本誌の編集委員会を兼ねることとなり、同時にわらべ館事務局の業務もより煩雑になった。ただ、私たちは五十年、百年後に、童謡・唱歌の研究、展示の貴重な「お宝」となっていることを信じてやまない。

にわか仕立ての組織による慣れない作業のため不備も多いと思われる。しかし、それらをカバーして余りある内容豊かな創刊号としてお届けできたのは、ひとえに片山善博・鳥取県知事、安田寛・奈良教育大教授をはじめ、玉稿をお寄せ下さった皆様のおかげである。この場を借りて感謝申し上げたい。

本誌が次号以降、充実し発展していく「伸びしろ」を残したとご理解いただき、読者諸氏のあたたかいご支援とご叱正を賜りたい。

（資料収集委員、『音夢』編集委員 藤井浩基）